

ユリア・ディン「21世紀のサハリン朝鮮人：適応過程の完了」

Yulia Din, Sakhalin Koreans in the 21st Century: Completion of their Adaptation Process

天野 尚樹・宋 恵 媛 訳

AMANO, Naoki and SONG, Hyewon (translated)

1. 安山市：歴史的故郷における二世と三世

2000年に建設された、ソウル近郊の安山市にある8棟のマンションからなる「故郷村」^{コヒャンマウル}へのサハリン朝鮮人一世の移住は、サハリン朝鮮人ディアスポラたちにとって一大事の始まりだった。帰還要請権がなかった朝鮮人二世と三世たちも、大韓民国に深い興味を示しはじめた。一世たちの帰還は、ロシアの国民に深刻な影響をもたらした経済的危機と同時期に起きた。発展した資本主義国家である韓国で自らの能力を試そうと職場を探すため、あるいは状況を把握してから新たな場所で人生を始めてみたいという漠然とした可能性を見据えて、多くのサハリン朝鮮人たちが大韓民国を目指した。

研究者たちがこれまでこの事実に注目しなかった理由は、公式資料に記録が残っていないからとみられる。サハリン朝鮮人たちは90日間の観光ビザで韓国に入国した。合法的な就業は禁じられていたので、3か月ごとにロシアに帰らなければならなかった。とはいえ、一世たちに提供された家に無料で住むことができた点で、彼らは韓国に住む中央アジア、ベトナム、フィリピンその他の国から

同じ目的でやって来た人々に比べて、特権を持っていた。韓国当局はサハリン朝鮮人たちに寛容だったし、今も同様である。なぜなら、韓国経済は労働力を必要としており、韓国人よりも少ない報酬でよく働くサハリン朝鮮人たちは貴重だからだ。サハリン朝鮮人たちはみな勤勉だが、いうまでもなく経済的には韓国人の競争相手ではない。またサハリン朝鮮人だったら、問題が発生した時に韓国を出国させるのも容易である。

安山に住むあるサハリン朝鮮人は、この「就業旅行」について次のように証言した。

韓国に初めてきた若い頃には、親の家に無料で住めました。その頃は、ほとんどの家に一人か二人の子どもが住んでいました。みな仕事を探しに来たのです¹。

職場を探すのはたやすかったです、重要だったのは、仕事だけして文句はいうなということです。サハリンにいた時よりも多くの収入を得られました。はい、そうです。ここでは暮らしやすかったです²。

だが、しばらくすると二世と三世たちの数は減っていった。韓国で彼らができる仕事といえば、専門職ではない低賃金労働だけだった。その原因は、韓国語の拙さ、ロシア的な考え方や行動様式、ロシアでの学歴が韓国で認められなかったこと、基本的な規則や法律についての常識の不足だった。結果的に、肉体労働たとえば荷物係、食器洗い、清掃員といった工場や工事現場での辛く「汚い」仕事をするのがサハリン朝鮮人の運命だった。

韓国に住んだことのある人々はみな、その社会での生活について自分なりの意見を持っている。

韓国では特に展望はありません。韓国人たちは、私たちを劣等な部類とみなして接します。田舎から出てきたばかりの、無知で教育も受けていない韓国人よりも、私たちが劣っているとみて私たちをいじめて〔……〕私たちはそんな待遇を受けることに慣れていませんでした。しかも、仕事は辛い肉体労働です。今ではそのような仕事ならサハリンでもみつかります。給料も悪くないし、私たちへの扱いはずっと良いです。また、ロシアではみな知り合い同士ですが、ここでは知らない人ばかりです³。

このような状況は、他の同胞、たとえば出稼ぎにやって来たウズベキスタン出身の高麗人コリョサラムたちにも起きていた。韓国語能力の不足、労働熟練度の低さ、考え方の違い等が、高麗人と韓国人の衝突の種になり、両者の共存は難しくなっていった⁴。

サハリンの経済状況が少しずつ良くなったことも、これに一役買った。サハリン朝鮮人

たちがロシアの新しい資本主義の現実にもうまく適応することができた理由には、流暢なロシア語、学歴が公認されたこと、進取の気性、寛容なロシア社会⁵等がある。これらの点は、彼らがロシア社会によく適応できた条件となったばかりでなく、ロシア社会でキャリアを積んで出世するにあたっての障害物をなくしもした。これとは条件が正反対の韓国で挫折を経験した人々はサハリンに戻り始め、サハリンの経済状況が良くなるにつれ、Uターン人口はますます増加した。

サハリン朝鮮人二世と三世は、かつて高齢者たちから聞いた、理想郷のように作り上げられた話しか知らない歴史的故郷と韓国人を、別のものであるように考えるようになった。個人的に韓国社会と衝突した大勢の人々は、自らのアイデンティティに再び悩むようになった。

私は、私たちが韓国人たちと似ているだろうといつも考えていました。でも、彼らはまったく違っていました〔……〕彼らはあたかも私たちよりも優れているかのように私たちを扱うのですが、私にはそれが理解できませんでした。そのとき私は少し考え、私が完全な韓国女性ではなく、違う何かを持っているサハリン朝鮮人女性だという結論に至りました。だから私はサハリンで生きていかなくは、ということです⁶。

私はサハリン人です。そう自覚もしています。韓国に行くかって？ どうしてですか。サハリンから出たくなったら、おそらく別の国に行きます、オーストラリアとかカナダとかアメリカとか。〔……〕私にとって韓

国は完全な異国です⁷。

一世たちも、自分の子や孫たちが韓国に移住することについて、考えを改めるようになった。

〔子どもたちは韓国に〕移住してこないでしょう、ありえません。たとえば私は、息子たちがここで働くことを望んでいません〔……〕私の長男は韓国で2年働きましたが、韓国の民族主義は私たちを非常に劣ったものとして見るのです。だからまるで野蠻人みたいに12時間も働かせておいて、昼休みはたったの30分でした。賃金も韓国人より安かったです。韓国人たちは汚いところでは働きたがりません。中国から来た人々だけがそんな仕事をします。だから私は、息子にここで働いてほしくありません。あの子たちがここに来なくなって8年も経ちました。いま長男は、サハリンで石油生産現場の監督をしていますが、待遇はいいです。でも、ここではひどくバカにされていました〔……〕もう韓国に行きたがる人は多くありません。小さな子どもが夏に短期間遊びにくるだけです。以前は韓国に親がいるからと考えていましたし、私も同じように、子どもたちのためにそのように考えていました。でも、もうそうは思いません。ここで働いたことのある人なら全員知っています。私たち親もみな、自分の子どもたちがここ韓国に住んで欲しいとは思いません⁸。

もし大規模な帰還が行われたら、一世と二世はすべてを奪われます。自己犠牲を強

いられることになります。非熟練労働に就くか、あるいは国のお金で生きていくか、社会的地位の上昇などどうやっても望めません〔……〕次の世代、つまり韓国で生まれた世代はまた違うかもしれませんが⁹。

韓国を訪れた若いサハリン朝鮮人たちは、韓国社会を冷静に評価するようになっていった。韓国社会にうまく同化できないという事実を認識し、自分たちが生きていく場所として皆がサハリンを選んだ。サハリン朝鮮人の間で2000年代初めに大規模に起きた韓国訪問の波は、2010年に入るとほぼ途切れてしまった。

前には本当に多くの人たちが韓国に来たし、違法であっても働いていました。でも、もうそんな人はおらず、夏休みに孫が来るだけです〔……〕今も韓国に残っているサハリン朝鮮人は、不法滞在状態でビザの問題で帰国できない人たちです。サハリンで同じ金額を稼げるのだったら、ここに来る理由がありますか？もうここには彼らのためのものなど何もありません¹⁰。

韓国社会の書き言葉、基準、規則、法律についての無知、(接触のなかった60年間に蓄積された) 文化的差異に対する理解不足等によって、サハリン朝鮮人たちは自分たちが「真の韓国人」であり、いつか韓国社会の一員になることができる存在であるとは考えなくなっていった。ロシア社会での適応という苦難の道を歩んできたサハリン朝鮮人ディアスポラの大部分が、韓国で苦勞と困難に直面し、それが解決される可能性もはっきり見えない

なかで、住む国を変えたくないと考えるのも無理はないことだった。

2. サハリン朝鮮人のアイデンティティ

自らを一定の人々で形成された集団の一員とみなす、民族アイデンティティに関する研究は容易ではない。朝鮮人ディアスポラの生活に影響を与えた独特な状況を考慮すると、サハリン朝鮮人の民族アイデンティティ研究は特に難しい。未解決の帰還問題、長いこと待ちわびた歴史的故郷への帰還、そしてそれがもたらした、サハリンには一時滞在中なのだという感情等は、自己アイデンティティの形成過程に影響を与えた（民族アイデンティティもその結果である）。この問題に対する統一見解はないので、単一の全体像を提示することは不可能である。

二世たちは、朝鮮人家族の中で育ち、ロシア語が第一言語ではあるが、(日常会話のレベルで) 朝鮮語をごく上手に操り、朝鮮人の慣習や伝統を細かく守っている。幼い頃にはほぼ朝鮮人同士で交流し（ソ連での生活が始まった頃、朝鮮人たちは準閉鎖社会で生きていくことを好んだ）、ソ連およびロシアで世界観や行動様式を身につけた。だがこれは、後に現代韓国社会に入っていこうとした多くの二世たちの前に立ちのぼる障害物となった。彼らの民族的アイデンティティ形成は、親の後を追って永住の地である韓国へと渡る可能性と緊密に関わっている。

韓国のイメージは、全てが美しく、豊かに「いい暮らしができる」と思えるような（これは二世の民族的アイデンティティ形成に影響を及ぼした、最も重要な要因の一つである）きわめて発展した国、というものだった。二

世の帰還可能性については絶えず話題になっていて、そのことも彼らの気分を動かしていた。韓国こそ自分の故郷であり、そこで暮らすことを夢見るサハリン朝鮮人も出てきた。

こんな代わり映えがしない毎日にはあきあきなんです。きっと韓国はもっと美しく、もっと豊かでしょう。私は朝鮮人だから、できることなら韓国に行きたいんです¹¹。

そう、本当に行きたいんです。韓国が私たちの故郷だと思うからです。子どものときの親の話のとおり、私たちはみな韓国を故郷だと考えています¹²。

儒教文化圏国家の特性、すなわち子どもが親に従う伝統は、サハリン朝鮮人二世たちの自我認識に大きな影響を与えた。ある人は、これについて次のように述べた。

なにしろ父はずっと朝鮮にあこがれていました、現実の暮らしがどうであったとしても〔……〕私たちにはいつも「とにかく、ここよりはマシだ!」とおっしゃっていました。私たちも当時は、なぜより良いのか、なぜより悪いのか分かりませんでした〔……〕私たちはここで生まれたのに、父の心はいつもあちらに向かっていました。そこが父の故郷だったからです。可能であればもちろん私も父と一緒に韓国に行きたはず¹³。

サハリン朝鮮人社会内にこのような考え方が存在していたことは確かだが、これとは異なる意見もあった。

外国人が韓国でやっていくのは絶対に不可能です。就ける仕事といえば辛い肉体労働のみ。大学を出たとか、専門が何だとかは何の意味もありません。働けなくなったら解雇されて終わりです。働かなければ、他にできることといえば死ぬことぐらいですかね¹⁴。

最初は私も自分だって朝鮮人なんだと考えていました〔……〕韓国に行ってから、私たちがどれだけ違うのかを見た瞬間、もうそんなことは考えなくなりました〔……〕私はおそらく民族的には朝鮮系だと思いますが、本物の韓国人のようには決してなれません。どうやらもう私は朝鮮人とは言えなくなっていたのです。〔……〕韓国では本当に苦しかったです。要するに、単一民族社会です。もちろん彼らは表立ってそうだとは言わないでしょう。私は韓国人の従兄と話したことがあります。従兄は自分の会社を持っているとっていました。だから、彼が望めば外国人であっても課長にすることもできる、とね。でも実際にそれをすると、他の韓国人たちが不満を持ち、従兄のいうことを聞かなくなるだろうとのことでした。外国人は韓国人より劣ったアウトサイダーだとみなされているのです¹⁵。

韓国で何をしたらいいというのでしょうか。自分の能力を活かせる仕事などにどうやっても就くことはできません。だから、サハリン朝鮮人には韓国でやれることがないんです。成人したばかりぐらいならどうにかなるかもしれませんが。何かを得よう

となどしてはだめ、おとなしくしていなさい、っていうこと¹⁶。

朝鮮語の書き言葉をよく知らないこと、ロシア式の考え方、行為様式、教育を韓国社会が評価しないこと、経歴を積むのが難しい状況等、全くもって客観的な要因が、サハリン朝鮮人と歴史的故郷との関係に大きな影響を与えた。このような状況下で、韓国社会の一員になろうという試みは困難にぶつかり、ロシア文化とロシア・アイデンティティが代わりに前面に出てくるようになった。

私はここで生まれ、家族、子どもたちも〔……〕生きている場所が故郷でしょ、そうでしょ？たしかに私は民族的には朝鮮人です、でも私はサハリン生まれなんです¹⁷。

これまで見てきたように、サハリン朝鮮人二世の中には、自分が朝鮮人であり、自分の親のように故郷から遠く離れたところに住んでいると考える人もいれば、民族にとらわれずに自らをロシア人と考える人もいる。サハリンで生まれ育ち今もそこで暮らしながら、朝鮮人とロシア人の慣習を守り、二つの言語を駆使し、ロシア法に従って生活しながら、韓国に関するあらゆることにも興味を持っている、それだけのことだと捉える人もいる。

サハリン朝鮮人三世は、一世や二世とは多くの面で異なる。三世は、サハリンの朝鮮人共同体の中では若手の、だいたい25歳から35歳までの若者たちである。彼らは朝鮮人学校で教育を受けていないため朝鮮語を知らず（朝鮮語を専門的に習った少数の者以外）、ソビエトやロシアの市民権を問題なく取得し、

ロシア人ともサハリン朝鮮人とも幅広く付き合い合う。

設問調査を通して、三世たちが自らのアイデンティティ問題についてあまり悩んでいないという点に著者は興味を持つようになった。

私が誰なのかを考えることは滅多にありません。韓国にいる時、あるいは韓国から来た人たちと一緒にいる時だけ考えます¹⁸。

ごくたまにです。たとえば、今のような質問に答える時にだけ考えます¹⁹。

私は次の3つの場合に自分のアイデンティティについて考えます。朝鮮語で話す時、音楽を聴く時、誰かと一緒にいる時です²⁰。

おそらく、アイデンティティの形成過程で内なる葛藤がないため、民族的帰属の問題にいつまでも思い煩うということがないのだろう。サハリン朝鮮人三世は、自らの民族アイデンティティの問題についてはかたをつけてしまっていると考えてよいだろう。

典型的な三世はほぼすべて、先祖のサハリン入島の経緯とは関係なく、自らを「地元の朝鮮人」と規定し、何よりもまず韓国の（さらに場合によっては北朝鮮の）朝鮮人とは違うのだということを強調する。

以前には、私はロシア人と朝鮮人のうち、自分がどちらに近いかと考えました。そして、個別的人格を持った個別の民族だという結論に至りました。私は何よりもサハリン人であって、それ以外は二の次です。自分

が韓国人（ハングキ）²¹だと感じることはありません²²。

私自身を韓国人だとは考えていません。もちろん私はロシア語でのみ考え、話します。私の故郷はサハリンです。言語や住んでいる場所の問題ではありません。言葉は学べますし、住む場所も変えられます。世界観や考え方は、自分が住んでいる場所にもそのまま残っています。私には、地元の朝鮮人と韓国から来た韓国人たちの違いがはっきり分かります。まったく違う存在です。私は彼らが好きですが、自分と関わりがあるとは思えません〔……〕韓国人は、日本人、中国人、あるいはアメリカ人と同様、ただ違う民族なのであって、私たちとは似ていません。私が彼らと似ていないということは、つまり私が韓国人ではないということです²³。

サハリン朝鮮人三世の民族的自我認識において、故郷や生家といった重要な場所は、本質的に規定されている。

故郷とは家のことです。大人になって結婚して家を出ても、いつも帰りたと思う、そんな家です。私の故郷はサハリンです²⁴。

ロシア、サハリン、ウグレゴルスク、朝鮮人街。故郷とは、私の心が安らかになる、そんな場所です²⁵。

故郷、それは私たちが属している場所であり、いつでも帰れる場所です。私にとってそれはサハリンです²⁶。

生活環境の違いは、各個人の民族的アイデンティティ形成に影響を及ぼす。民族的自我認識は、日常生活で民族文化にどれほど重きがおかれていたか、そして異文化（多くの場合、民族的多数者の文化）にうまく統合されつつ自民族文化をどれほど維持できるかによることが多い。社会的地位の上昇、生活水準の向上、教育の恩恵を享受するための適応が不可避であり、したがってロシア語を主要言語として身につけなければならないと考えるようになる。その結果、ソビエト・ロシア社会に適應するためにマジョリティの行動様式を受け入れるようになるのである。

朝鮮人共同体史の初めの数十年間、朝鮮人の伝統文化は、それをもたらしたサハリン朝鮮人一世たちとの直接的な関係のおかげで維持された。一世の大韓民国への帰還は、部分的ではあれ歴史的祖国とのつながりを回復させた一方で、古い世代から若い世代への民族文化情報の伝達システムを壊してしまったのである。

民族的アイデンティティの変化もまた、適応過程の当然の帰結だった。二世は全く異なる2つの集団、つまり自らを韓国人と見なし韓国で生きていこうとする人々と、ロシアとサハリンが自らの故郷だという人々に分けられる。若く、自分の帰属に疑問を抱かない三世は、自らを「真の韓国人」と認識していないため、帰還にまつわる困難や課題を克服せねばならないとは考えない。

上述した民族アイデンティティの変化の過程は全く自然なもので、ディアスポラ集団ではいつも起きているものだ。サハリンに移住したロシア人一世の現地アイデンティティも、その一例である。〔流刑囚だった〕一世た

ちは自らの意志で島に来たわけではなかったので、サハリンから出ようとした。それに対して二世とそれ以降の世代は、自分の人生や運命をサハリンと共にしたのである²⁷。

3. ディアスポラとしてのサハリン朝鮮人共同体

「共同体」、「民族住民」、「少数民族」といった用語を用い、サハリン朝鮮人を民族ディアスポラとして規定した研究者は少ない。サハリン朝鮮人に関する著書を初めて刊行したボク・ジコウも、サハリン朝鮮人史に関する最も広範な著書を著したアナトーリー・クージンも、「ディアスポラ」という用語は使っていない。著者はその理由を、「ディアスポラ」という概念に多様な人文学的評価や解釈があるためだと考える。この多様さは、採用するアプローチの方法と研究過程で設定した各々の研究課題が、研究者ごとに異なることで生じたものだ。

「ディアスポラ」という用語はギリシャ語から由来した言葉で、「分散」、「他方向への拡散」を意味しており²⁸、ある民族集団もしくはその集団の多数が固有の領土から離れ、他の民族集団が居住する領土に住むことと理解されている。この用語は長い間、ユダヤ人ディアスポラに対してしか使用されてこなかった。しかし今では多くの研究者たちが、ユダヤ人その他の「古くからの」ディアスポラ（たとえば、アルメニア人ディアスポラ）を古典的ディアスポラとし、主に19、20世紀に発生したより新しいディアスポラにも適用できる定義をつくらうとしている²⁹。

『ロシア簡易百科事典』では「ディアスポラ」を、「自分の出身地域の外で生活する民族

集団」と定義する³⁰。また、『民族集団とスタヴロポリのディアスポラ』というハンドブックの著者たちは「ディアスポラ」を、自然で歴史的な過程によって作られた社会構造であり、組織的であるとは限らない民族的集団とみなす³¹。

しかし、上記の二つの定義はどちらも極めて茫漠としていて、「ディアスポラ」という用語を、国内外を問わず、大規模に集団が移動するおそらくありとあらゆる現象にあてはまってしまう。専門家たちは「ディアスポラ」をより正確に定義しようと論争中だ。

『ロシア簡易百科事典』の「ディアスポラ」の項目でシニレリマンは、民族的出自の地の外への分散すべてではなく、不幸な状況（戦争、飢餓、強制的な国外追放等）による意思に反した移住に限ってディアスポラとする。シニレリマンは、「ディアスポラ症候群」と名付ける独特な現象、つまり民族的屈辱、怒り、絶望の感情によってディアスポラが構築されると考えた³²。

ディアスポラと民族集団を同一視したイラリオノワは民族集団を、自国の境界外において他民族の間で市民権を取得し、長い年月暮らしている人たちの共同体と定義した。このような共同体は、イラリオノワの定義によれば、集団的アイデンティティを保有しており、その数および人口構成上、十分に言語、文化、行動パターンを再生産できる。またその共同体は自民族の領土と独特の関係を維持し続ける。というのも、「民族とその居住地域との関係は単に存在するというだけでなく、自民族の空間への権利も、他の諸民族の空間に分散する権利も喪失した状態にありながら、先祖の領土への帰還という考えを歴史的記憶の中

で再生産する民族的行動パターンを構成し、形成する根源」だからである³³。

クシハビエフはディアスポラを、構成員たちが自らの民族的故郷の境界から離れて他民族の間で暮らしつつも、その共同体を想像し、自らの民族的特性を維持している民族的、宗教的共同体であると定義した³⁴。

ポロスコヴァはその著書『現代のディアスポラ』で、「ディアスポラ」の概念を定義するための基本的な指標を規定している。すなわち、民族アイデンティティ、文化的価値の共通性、民族的・歴史的独自性を保ち続けようという意味、共通の歴史的起源を想像できるイメージである。また、自分はある民族の一部で、いまは一時的に他国に住んでいるだけだと考えるディアスポラ独特の感覚はもちろんのこと、現在居住している国家と歴史的故郷との相互関係を保つ固有の戦略、民族活動の保護と発展を追求する機構や組織の結成も重要である。ポロスコヴァによれば、民族アイデンティティはディアスポラ構築の基礎であり、共通の（民族固有な）言語や宗教、領土（民族）の一体性といった制度形成的要因に取って代わるものである³⁵。

レヴィンは、同じ出自であるという認識を保ったまま、歴史的故郷や民族集団の大多数の居住地域から離れた場所に住む民族、あるいは民族の一部としてディアスポラを理解する。ディアスポラ集団の構成員たちを、現在生活する地域の他の住民たちと自分たちを明確に区別する、その集団固有の特性を失いたくないという気持ちと、同時に（自覚的にであれ、無自覚にであれ）今の居住国の秩序に従って生きるほかないという心がまえを併せ持っているのが、その集団的特性であると強

調した³⁶。

また、レヴィンによれば、最も一般的なディアスポラの存在形態は、ディアスポラ組織の総体である社会的有機体として、能動的成員と「統計上の」成員（共同体と共通の心性を保持してはいるという意味での）からなる移住者、および制度的機構の総体としての飛び地共同体である。ディアスポラの心理的特性は典型的な二項対立「我ら／彼ら」で規定される³⁷。

ブルベイケルはディアスポラを散種された民族と定義し、分離されていたとしても、実在のあるいは想像上の故郷を感情的もしくは政治的に志向する態度が特に重要であると指摘する。この用語解釈は、「ディアスポラ－故郷－受け入れ国」という線で相互に結ばれた三者関係の存在を前提にしている³⁸。

ウスマノフは、故郷に関する観念と、その観念に基づいて発生した集団的關係、集団的連帯性、出自について示された態度によって結びつく文化的に独自の集団をディアスポラとする。さらに、世界に広がる共同体の一部を構成し、国際関係にも影響を与える集団的アイデンティティに基づいた集団であるとも述べている³⁹。

ディヤトロフはディアスポラを、人間の相互作用の特別な形態であり、運命の共同性（出－歴史的故郷、あるいはその手の神話）〔出－エジプトなど〕と、他民族の社会のなかの少数民族民族として「分散された状況で」生活様式を維持しようとする共同の努力とに由来する公式・非公式な結びつきを持つ特異な体系であるという。このようなアプローチだと、民族的出自の外に住む民族集団に帰属していること自体では、新たな故郷に一定数以上の数

で定着していたとしても、それだけでディアスポラとはいえず、ディアスポラの必要条件の一つにすぎない⁴⁰。

ディアスポラを社会学的観点から分析したトシチェンコとチャプトゥイコワは、自らの歴史的故郷の外で（あるいは自民族の分布圏外で）異民族に囲まれて生活し、その共同体が発展し機能するための社会的機構を有している単一起源の民族による強固な総体だと定義した。また、ディアスポラの存在を相当程度規定する本質的指標は、相対的に自足した組織としてディアスポラの実質を長期持続させることができる自己組織化能力にあると主張する⁴¹。

アストヴァツァトゥロワはサヴェリエフとの共著書で、ディアスポラであるかどうかの分かれ目はどこにあるかを検討し、内なる結束への希求、共通の社会経済的需要としての民族的利益を組織し、まとめ、達成するための能力をディアスポラの存在を分ける最も重要な指標だとしている⁴²。

『民族誌学レビュー』誌に掲載された、ティシコフ、セミョーノフ、アルチュノフの討論内容は、「ディアスポラ」という用語の定義において大変興味深い事実を提供している。

ティシコフは古典的定義の短所に言及しつつも、ディアスポラという現象が存在すること自体は明白であるとし、「世界文化システムへの肯定的な関わりの上に構築されたディアスポラ性は、現代のトランスナショナルな文脈においてはユートピア性やメタファーを含むこともあるが、「損失」、「追放」、「周縁性」といった伝統的なイデオロギーは薄れ、成功した適応や有用なコスモポリタニズムといった建設的で緊要な戦略がより反映されている」

と述べた⁴³。

セミョーノフは、ロシア国内の文献の中で「ディアスポラ」という用語が幅広く使われているにもかかわらず、その概念が十分に洗練されていないという点で、ティシコフの見解に同意する。セミョーノフは、民族の一部が自民族の領土の境界外に住んでいる場合や、一般的には同化過程に置かれていたとしても自己アイデンティティを維持している場合に限り「民族的ディアスポラ」という用語を使うことを提案した。そして、他文化に馴染んでゆく状況下で彼らをひとつに結びつけるものは、故郷についての記憶であると述べている⁴⁴。

アルチュノフは、ディアスポラが国家からではなく（つまり、ディアスポラにおける国家の体制形成の役割を否定する）、国民国家を領有することができることもできないこともある民族社会組織から発生するという事実を強調した。彼は、国家と国境の意味に対する過大評価が民族世界の「コア」と「ディアスポラ」をまったく別な世界に分けてしまったとティシコフを批判した。アルチュノフによれば、「非ディアスポラ」からディアスポラには切れ目なく移行することが可能であり、ディアスポラの境界は不安定あるいは不在のこともあるため、そのような区切れがいつも正しいわけではない。つまりディアスポラとは静態的な状態ではなく、「まだディアスポラではない段階」が「ディアスポラの段階」を経て「もはやディアスポラではない段階」へと発展する過程であるという⁴⁵。

以上を要約すると、人文学において「ディアスポラ」には実に多くの解釈が存在するが、その中で共通しているのは、帰属する民族が

最初に定着した場所から離れた場所に定住している民族集団がディアスポラだという規定である。したがって、全ての民族集団がディアスポラの定義に該当するわけではない。独自の民族社会組織、すなわちディアスポラと区分できる特有の指標を持っている場合にのみあてはまる。

上述した命題に基づいて、次のような問題を提起したい。はたしてサハリン朝鮮人はディアスポラなのか。

サハリン朝鮮人がある特定の民族に帰属しているということについては疑問の余地はない。明確に表明された民族アイデンティティによるばかりでなく、この民族集団が国家から公式的に認定されていることからそうみなすことができる。ロシア連邦サハリン州における朝鮮人の存在はあらゆる公式統計に見出すことができる（民族帰属の基準が文書で規定されていたかつて、自己申告となった現在も）。はっきりと違いが見分けられる朝鮮人たちの外見もその助けとなった。多数民族（ロシア人）と少数民族（朝鮮人）が互いに異なる人種的・人類学的な類型に属しているため、両者は明確に区分できる。

サハリン島とクリル諸島への朝鮮人の移住には一連の固有な特徴がある。悲劇的な事実である1910年の日本による韓国併合は、サハリンへの朝鮮人たちの移住の出発点だった。移住の第一段階は大規模なものではなかった。だが、太平洋戦争の勃発後に日本当局が発表した労働動員により、朝鮮人たちの大規模なサハリン入島が起こった。サハリン行きへの希望が問われることは少なく、全く問われないこともあった。徴用でサハリンにやってきた人々は樺太の朝鮮人住民の半数を超え

た。強制的または半強制的な移住という悲劇的な事実は集合的歴史記憶の一部である（シニレリマンによると、これはディアスポラの最も重要な指標である）。

ディアスポラ研究者たちの多くは、ディアスポラが集団として存続し続けるためには、言語、文化、行動様式が慣習化して再生産されるに足るだけの人数がいなければならないことを強調していた。サハリン州に定住した朝鮮人の人口は、1959年（戦後ソビエトで初めて国勢調査が実施された年である）から2010年の間に4万2000人から2万6000人へと変化した。だが、サハリン州の全人口に対する朝鮮人の比率は、この期間つねに5～6%台を維持した。

しかし、ひとつの民族集団の絶対数だけでは根拠とはなりにくい。比較すると状況が理解しやすくなるだろう。たとえば、19世紀のラテンアメリカにおけるロシア住民は3万4682人でその地域全体人口の4.86%を占めたが彼らはディアスポラと見なされた⁴⁶。トルコにおけるオセツト人ディアスポラは、およその推定によれば、現在約10万人程度（全人口の1%以下）だが、1世紀以上トルコに住んできたにもかかわらず、ディアスポラ集団としてのあらゆる指標を維持し続けている⁴⁷。20世紀初めのロシア帝国黒海県のギリシャ人ディアスポラは1万1383人で県人口の9.2%だった⁴⁸。カザフスタンの高麗人コリョソラムディアスポラは、1999年の人口調査によると9万9665人だった（全体人口の0.7%）⁴⁹。こうした数値は、サハリン州朝鮮人ディアスポラの数的指標のよい比較対象となろう。

言語、文化、行動様式、民族文化的な特徴の再生産、文化的価値の共通性、民族的文化

的独自性維持への希求は、(人間心理の分野に関する全てのものがそうであるように) 多面的で複雑な問題である。サハリン朝鮮人におけるロシア社会への適応過程の種々の側面、たとえば母国語〔朝鮮語〕の喪失問題（これは明白な事実とっていいだろう）を評価する必要がある。2002年の人口調査によるとサハリン朝鮮人のうち99.29%がロシア語を母語と回答し⁵⁰、2010年にはその数は99.77%にまで増加した⁵¹。

サハリン朝鮮人たちの生活の中で朝鮮語が実質的に使われていない状況下では無理もない。朝鮮人学校が閉鎖され、ロシア語での教育に移行した1960年代半ばには朝鮮語の消滅は時間の問題となった。むろん世界には大多数が2言語、3言語をあやつる民族集団（たとえば、パラグアイ人、ルクセンブルク人、ソルブ人など）も存在するが、それはあくまでも例外である⁵²。2言語の維持が生きていくうえでの死活問題であるか、もしくは国家による保護がなければ言語的特性を維持することは事実上不可能である。たとえば、前述したカザフスタン高麗人ディアスポラのうち、ロシア語を使用する朝鮮人は97.7%に達する。実際、1999年の国勢調査では、「朝鮮語が分かる」と回答した高麗人は25.8%だった。ただし岡奈津子は、カザフスタン高麗人の4分の1が朝鮮語を流暢に話すのに、回答者の多くが、朝鮮語が分からないと申告しているのはおかしいと指摘している⁵³。

文化的独自性という問題においては少し状況が異なる。慣習と伝統は、民族の情報を伝達する役割を果たし、国民の民族的個性を規定する。民族固有の伝統と慣習は、完全に異民族に囲まれた環境であっても長い間維持で

きるだけでなく、現実が示すように、変形されることもあれば、他の文化共同体の慣習および伝統と共存することもある。サハリン共同体の環境下における朝鮮民族の慣習と伝統は、たとえそれが異民族の影響によって変形されたとしても以前と同様に強力である。ベギルチャンチ「百日祝」、ファンガブ結婚、葬儀、還暦、民族料理の伝統的要素の保存といった民族的儀式的順守がそれである⁵⁴。クシハビエフのいう民族文化の特性は、生活様式、経済活動の形態、家族関係の調整、子どもの教育等において決定的な役割を果たし、そのようにしてディアスポラを形成する。

イラリオノヴァが述べる民族空間との明確な関係、出身地域との相互関係のための独自戦略（ポロスコワ）、歴史的故郷への心情的・政治的経済的志向（ブルベイケル）を主張する研究者たちは、ディアスポラの世界観に（実在のあるいは想像上の）歴史的故郷に対する観念の集合体として表れるある種独特な象徴が存在するという意見に同意する。ディアスポラの認識において重要な役割を果たすのは、出身、移住、運命の共通性である（ディヤトロフ）。故郷の記憶（セミヨーノフ）は、様々な人々をひとつにし、世界およびその世界の中での自らの位置についての共通のまなざしを形成する強力な感情的紐帯となる。

サハリン朝鮮人たちは民族集団の一つであり、彼らの現実認識は歴史的故郷についての観念と、故郷帰還への渴望に強い影響を受けた。来島の経緯と叶わなかった帰還の記憶は共同体の集団的記憶において突出した役割を果たしている。朝鮮人たちがどのようにサハリン島にやって来たのか、あるいはどのように移送されてきたのか、1945～1946年に新

たな権力が日本との国境をどのように閉鎖したのか、戦後初期に朝鮮人を故郷に帰してくれる船をどれほど待ちわびていたのかについて数百編の文章が書かれてきた。来島と帰還の記憶は口伝の伝統においてより大きな比重を占める。老人たちはしばしばこの出来事について話す。帰ることのできない歴史的故郷、集団の悲劇的運命、別れた家族等についてのイメージはもちろん、公正さが早く取り戻されることへの希望がサハリン朝鮮人たちの脳裏に刻まれたばかりでなく、多くの人々の行動や決断に直接的に影響を及ぼした。その帰結が、適応に対する消極的反抗、国籍選択における葛藤、1960年代の教育と永住を目的としたサハリン二世たちの北朝鮮行き、1977年の悲劇的な事件⁵⁵へと帰結した帰還運動、そして遂に実現した1990年から2000年にかけてのサハリン朝鮮人一世の大規模な韓国帰還であるといつてよいだろう。

共同体の生活に現住国が積極的に干渉するのは国家との関係において共同体独自の戦略が存在するからである。ソ連のような権威主義国家ではそれ以外あり得なかったのだが、ソ連の体制は、個々の市民や社会生活に対する国家の積極的な干渉を前提としていた。ここで補足すべきは、朝鮮半島で互いに敵対する二つの国家の存在が、ソ連政府をして朝鮮人共同体の日常生活に政治的な理由からも積極的に干渉するようにさせた点である。サハリン朝鮮人たちは、敵対国（韓国）が統治する地域の出身者とみなされた。それと同時に、ソ連とは公式には同盟国ではあるが、決して簡単な関係とはいえない朝鮮民主主義人民共和国とも彼らは緊密に繋がっていた。サハリン朝鮮人の日常生活に対する現住国家の積極

的な干渉はティシコフのいうディアスポラの最も重要な指標のひとつである。

サハリン朝鮮人はソビエト時代にも独自の民族組織を設立したいと考えていた。別の言い方をすれば彼らは、アストヴァツァトゥロワがディアスポラの指標と規定した内的統合への渴望を経験したのであり、ソビエト体制からたびたび抑圧された自らの独自性と文化をこの内的統合によって守ろうとしたのである。

それと同時に、ソビエト時代には、(ポロスコワが唱えるディアスポラの指標である) 民族的独自性の維持と発展のための公的な機構や組織が存在していた。これらはむしろ、国家の統制下で国家の援助を受けながら活動していた。そのうち、朝鮮人教育体制、朝鮮劇場、朝鮮語新聞は特記すべきものだ。

1991年以降の政治的民主化の中で、サハリンでは多数の朝鮮人社会組織が登場した⁵⁶。その組織の関心の範囲は、歴史的祖国への帰還支援から、民族言語と文化を可能な限り維持することにまで及んだ。言い換えれば、サハリンには社会機構が存在している。こうした機構がディアスポラ存続の指標である点についてはトシチェンコとチャプトゥイコワが言及した通りである。

サハリン朝鮮人一世の大韓民国への帰還は、民族的利益を達成できる能力(アストヴァツァトゥロワによる記述を参照)に加えて、ウスマノワがいうように、その達成のために政策決定に影響力を行使し、国際情勢を利用するだけの能力を朝鮮人共同体が有していることを証明した。高齢のサハリン朝鮮人の帰還だけでみても、共同体の内的な力の統合が必要とされただけでなく、ロシア、日本、韓

国の政府を交渉のテーブルにつかせ、帰還の方法について合意するよう動かしたのである。

サハリン朝鮮人の共同体内部には民族アイデンティティ指標「私は朝鮮人である」と、固有の民族の呼称「私はサハリン朝鮮人である」がともに存在するが、それは、明確に範囲を区切られた集団に自らを組み込むという集団的アイデンティティの特質を反映している。

「自分」とよそ者(新参のよそ者であるロシア人もその一部だ)の明確な区別は常に存在したし、サハリンの朝鮮人共同体の中にすらそうした区別がもたらされた。1945年以降にサハリン朝鮮人共同体に加わった集団は「よそ者」とみなされた。サハリン朝鮮人の大多数は、1910年から1945年までの自発的あるいは強制的な移住者たちの子孫としての自分を「地元の朝鮮人」とみなし、戦後に中央アジアと北朝鮮から来た移住者たちをそれぞれ「大陸系朝鮮人」、「北朝鮮人」と呼んだのである⁵⁷。

誰もが理解できる用語で国際交渉をおこなう必要が出てきてようやく「サハリン朝鮮人」という統一された呼称が使用されるようになり、それがやがて日常生活でも政治の場でも学術用語としても使われるようになった。その頃までには「大陸系朝鮮人」と「北朝鮮人」はサハリンを去ったか、残っても少数派ゆえに主集団に吸収されていった。このような条件下で「サハリン朝鮮人」という自称は、大韓民国の朝鮮人たちとの関係において、「自分」を彼らと同一視させるという新たな機能を果たし始めた。二重の民族アイデンティティに加えて、ディアスポラの重要な特性だ

とレヴィンが規定した「我ら／彼ら」という特有の心性も存在したのである。

日本帝国の時代に南サハリンに移住した朝鮮人たちはまだディアスポラではなかった。彼／彼女たちの多くにとってそれは一時的移住のつもりであった。だが、歴史的出来事の数々が朝鮮人共同体をディアスポラへと変えた。つまり、ロシア人研究者たちが提示した、ある民族集団をディアスポラと認めるための一連の指標をサハリン朝鮮人共同体は獲得していったのである。

しかし、歴史はひとところにとどまることなく流れつづける。今後、サハリンの民族的朝鮮人は異文化〔ロシア文化〕の環境に溶け込んでいくだろう。そのような蓋然性が存在することは、朝鮮人ディアスポラの間で進行しつつある統合過程が証明している。だが、まだそれはまだ完了していない。したがって私たちは、サハリン朝鮮人共同体をディアスポラと呼称することができるのである。

【訳者解説】

ここに訳出するユリア・ディン「21世紀のサハリン朝鮮人」は帝国日本の負の遺産の現在を論じたものである。サハリン島は北海道の北43キロに位置し、面積は北海道よりやや小さい、世界で23番目の大きさの島である(北海道は22番目)。1905年～1945年までの40年間、この島の北緯50度線上に国境線が引かれ、北半分がロシア・ソ連領、南半分が日本領となり樺太と呼ばれた。

1941年時点で40万6557人が暮らした日本領樺太で、日本人に次ぐエスニック集団だったのが朝鮮人である。1920年代に増えはじめた樺太への朝鮮人移住者は1941年時点で1万

9768人を数えた。ここから45年の敗戦までの樺太朝鮮人の人口動態は変動が激しく正確な捕捉が難しい。1944年8月、樺太北部の炭鉱労働者は常磐・九州の炭鉱への転出を命じられた。「急速転換」と呼ばれるこの措置で樺太を後にした朝鮮人は少なくない。一方、1939年以降の徴用、いわゆる強制連行によって朝鮮半島から樺太に移送された労働者は1万6000人を超えるといわれている。日本の敗戦でソ連統治下に移行した時点でサハリン島南部にいた朝鮮人は2万5000人前後とみられる。ディンが研究対象とするのは彼／彼女たちとその子孫の二世、三世であり、彼／彼女たちを総称して「サハリン朝鮮人」と呼ぶ。

自身もサハリン朝鮮人3世であるディンは、サハリン州郷土博物館(ユジノサハリンスク市)の上級研究員を勤めるサハリン朝鮮人史研究の第一人者である。歴史学博士候補(Ph.D.に当たる。ロシアでは国家資格)の学位に加え、留学先の高麗大学で修士号も取得している。この留学は、一世である祖母と安山市に暮らしながらおこなわれた。この留学中におこなった数多くのインタビューが本稿の主要な典拠になっている。

今回訳出したのは、博士候補論文をもとにしたモノグラフ『サハリンの朝鮮人ディアスポラ：帰還と、ソ連・ロシア社会への統合の問題』の最終第6章「21世紀のサハリン朝鮮人」である。本書は、日本領樺太時代からソ連統治時代を経て現在にいたるサハリン朝鮮人の歴史的経験の通史である。そのうち現状分析の章を今回訳出したのは、彼／彼女たちの現在を知ることができる日本語の文献がほほないことが最大の理由である。大沼保昭『サハリン棄民：戦後責任の点景』(中公新書、

1992年) や、ディンも寄稿した今西一編『北東アジアのコリアン・ディアスポラ：サハリン・樺太を中心に』(小樽商科大学出版会、2012年) など数は少ないものの一定の蓄積がある日本の研究史の空白を埋める価値が本稿にはある。

在日朝鮮人同様、サハリン朝鮮人の大部分が朝鮮半島南部の出身者だった。戦後の南北分断でそこは大韓民国領となったが、冷戦体制下で敵対するソ連と韓国は1990年まで国交がなく、彼／彼女たちの歴史的故郷はソ連の国際関係において「帰国」の対象にはなりえなかった。国交回復後の1991年からサハリン朝鮮人の帰還事業がはじまる。2000年にはソウル近郊の安山市に、韓国政府と日本赤十字が合同で集合住宅地「故郷村」を建設した。1991年～2013年までに「故郷村」、仁川、釜山など23か所に約4000名が帰還したとされる。本稿の主な舞台はこのうち最も多くのサハリン朝鮮人が暮らす安山市「故郷村」である。

本稿は、2015年刊のロシア語版 (Корейская диаспора на Сахалине: проблема репатриации и интеграция в советское и российское общество. Южно-Сахалинск: Сахалинская областная типография) と、2020年に韓国で出版された朝鮮語版 (진 울리아 이바노브나 (김중현 옮김) 『사할린의 한인 디아스포라 본국 귀환 문제 그리고 소비에트와 러시아 사회로의 통합』, 선인) の両方を底本としている。これは原著者のディンから、ロシア語版での誤りの修正や情報のアップデートがおこなわれている朝鮮語版も合わせて参照してほしいとの依頼があったためである。そこで、ロシア語使用者の天野と、朝鮮語使

用者の宋がそれぞれのテキストから訳文を作成し、両者をすり合わせて決定稿を作成するというプロセスをとった。

訳出にあたっての最大の難題は、ロシア語のサハリンスキエ・カレイツイ (Сахалинские корейцы) という朝鮮人たちの呼称を、どのように日本語に置きかえるかであった。彼／彼女たちの呼び名は、日本による植民地支配、解放後の朝鮮南北分断、居住国での地位や南北の国家との関係などといった諸要素が絡みあうなかで変化したため、単一の語で言い表すのは困難である。本稿では、全ての時期のサハリンの朝鮮人たちを網羅的かつ統一的に言い表す訳語として「サハリン朝鮮人」を当てた。朝鮮人という語を採用した理由の第一は、これらの人々の起源すなわち歴史的故郷が分断以前の朝鮮にあるからである。これまでに日本で刊行されたサハリン朝鮮人関連の論文や書籍でも、朝鮮人という語が主として使用されてきた。そして第二に、1990年代に至るまでの長年にわたり彼／彼女たちが朝鮮語では朝鮮人と自称して使ってきたからである。

ただし原著者のディンによれば、安山をはじめとする韓国在住サハリン朝鮮人社会では、1990年代前半から使われ始めた「サハリン^{ハニン}韓人」という語が、現在は朝鮮語での呼び名としてはほぼ定着しているという。2000年代以降の動向を扱ったこの論考は、人々が韓国との直接的な接触とその後の幻滅を経て、サハリンを^{ローディナ}故郷とする朝鮮人という独自のアイデンティティを獲得していく過程を描いたものである。そのような状況にあってもなお、韓国という国家と結びついた韓人という語は使用されつづけているということになる。

韓人というのは、1948年に建国された大韓民国から外に出た移民を指す、韓国で作られ使用されている語である。したがって、それ以前に朝鮮半島を後にした中央アジアの高麗人、中国朝鮮族、在日朝鮮人などのディアスポラ集団の間では韓人という用語はほとんど定着していない。これらの人々には、強烈な韓国ナショナリズム、すなわち本国人としての優越意識や、朝鮮民主主義人民共和国への対抗意識が馴染まない場合も多い。このようにみると、韓人という呼称を選択したサハリン朝鮮人の特殊性が浮かび上がる。

ではなぜ、サハリンの朝鮮人たちは1990年代初めに「サハリン韓人」を名乗るに至ったのか。端的に言えば、それは他地域の朝鮮人集団、それも自らと近いそれらとの差別化を図った結果である。1948年以降、「朝鮮人」という語から真っ先に連想されるようになっていった朝鮮民主主義人民共和国の国民とも、「高麗人」という呼称を早くから選択した中央アジアのソ連系朝鮮人たちとも異なる名称を、彼／彼女たちは求めたのだった。

高麗という語は極東地域の朝鮮人たちに起源を持つ。それが使用された初期の例として、1921年5月にイルクーツクと上海で誕生した二つの高麗共産党が挙げられる。日本の支配下に置かれている朝鮮あるいは大韓帝国と切り離し、共産主義思想を帯びた極東地域の朝鮮人独特のアイデンティティを示すための名称として、朝鮮半島初の統一国家の名である「高麗」が呼び起こされたのだった。1923年にウラジオストクで創刊された朝鮮語新聞『先鋒』が、高麗人や高麗語コリョマルという語を広めた。だが、1937年にスターリン政権下で中央アジアへの強制移住が行われると、カザフス

タンのアルマトイに本拠を移した同紙は『レニンキチ（レーニンの旗）』と改題した。「高麗」という語が積極的に用いられることもなくなっていた。ただし、1948年に建国された朝鮮民主主義人民共和国とソ連がしばらく友好関係にあったこともあり、朝鮮という語は使い続けられた。その後、「高麗」の名が前面に押し出されるようになるのは、ソ連崩壊後のことである。1991年に『レニンキチ』が『高麗日報』へと改題されたのは象徴的である。1990年代初めに高麗人たちが南北対立を超えた独自の道を選んだとしたら、サハリンの朝鮮人たちはしばしの混乱の末に南を選択したといえる。ペレストロイカ、ソウルオリンピック、韓ソ国交樹立、ソ連崩壊という国家と民族の概念を揺るがす歴史的事件が立て続けに起こるなか、サハリンは南北両国家が互いに自国の影響力拡大を競い合う場となった。だが、身近な存在だった北との関係が以前から冷え切っていたこともあり、サハリン朝鮮人たちの歴史的故郷を国土に含む南の韓国が圧倒的な優位に立った。

このときのサハリン朝鮮人社会の名づけをめぐる混迷ぶりは、以下の二つの例にもはっきりと表れている。一つはサハリンの朝鮮人社会組織の名称である。1989年に発足した韓国への永住帰国支援団体である離散家族協会は、その翌年にまず朝鮮人連合会と改称した。だがすぐにサハリン高麗人協会へと変わり、さらに1993年にサハリン韓人協会と再び名称を変更した。もう一つはコミュニティの新聞の紙名である。1949年の創刊時に『朝鮮労働者』と命名された朝鮮語新聞は、1961年に『レーニンの道へ』と改称していたが、1991年に『新高麗新聞』と名を改めた。同紙は現

在も発行が続けられているが、改題が数年早かったら「朝鮮」、数年遅かったら「韓」という字が紙名に含まれていたことだろう。

この時期の「朝鮮人」から「韓人」への名称変化は、韓国政府によるサハリン朝鮮人取り込み政策の成功を裏書きしている。ただし、韓国人を表す新たな造語「ハングキ」がその後、サハリン朝鮮人社会で出現したことは、彼／彼女たちがすでに韓国を他者化する途についていることを示唆するものといえる。

なお、旧ソ連の朝鮮人を表す呼称として日本でも比較的知られている語に、カレイスキーという語がある。これはロシア語で「朝鮮人の」という男性形の形容詞であり、「朝鮮人たちは正しくはカレイツイとなる。中央アジアの朝鮮人たちが韓国で関心を向けられるようになってまもない1990年代半ば、カレイスキーという名を冠したテレビドラマや書籍が韓国で生み出された。この当初の誤訳が正されないまま、韓国や日本の一部で流通し続けているものとみられる。

なお、本文中の()は原著者、[]は訳者による補足説明である。

註

- 1 男性、1934年生、安山、2010年6月10日。
- 2 女性、1935年生、安山、2011年3月2日。
- 3 男性、1980年生、ユジノサハリンスク、2010年12月18日。
- 4 Тен М. Д. Особенности личных взаимоотношений корейцев Узбекистана с корейцами Республики Корея в трудовых коллективах // Актуальные вопросы корееведения: проблемы и перспективы: сборник материалов II международной научно-практической конференции, июнь 2011. Уссурийск, 2011. С. 240–243.
- 5 このような面については、著者もテイシコフの見解に同意する。ソ連の少数民族政策にはあまたの犠牲、制約そして犯罪すらあったが、文化（芸術、文学、学術、教育）的にも社会経済的にも、民族の多様性を認め、それを支援するのがあくまでソ連の政策だった。ソ連邦とロシア連邦は、「多民族」と「民族友好」を公式の政策に定めた国家である。
Тишков В. А. Единство в многообразии: публикации из журнала «Этнопанорама» 1999–2011 гг. 2-е изд., перераб. и доп. Оренбург: издательский центр ОГАУ, 2011. С. 114–115.
- 6 女性、1977年生、ユジノサハリンスク、2010年11月9日。
- 7 女性、1980年生、ユジノサハリンスク、2010年9月13日。
- 8 男性、1938年生、安山、2010年6月10日。
- 9 男性、1943年生、釜山、2010年6月17日。
- 10 男性、1938年生、安山、2010年6月10日。
- 11 男性、1958年生、ユジノサハリンスク、2010年8月28日。
- 12 女性、1960年、ユジノサハリンスク、2010年7月17日。
- 13 女性、1951年、ウグレザヴォーツク、2009年2月1日。
- 14 女性、1958年生、ユジノサハリンスク、2010年11月14日。
- 15 男性、1952年生、ユジノサハリンスク、2009年4月12日。
- 16 女性、1947年生、ユジノサハリンスク、2008年12月19日。
- 17 女性、1945年生、ユジノサハリンスク、2008年12月28日。
- 18 女性、1989年生、ユジノサハリンスク、2010年8月14日。
- 19 男性、1977年生、ユジノサハリンスク、2010

- 年8月14日。
- 20 女性、1977年生、ユジノサハリンスク、2010年11月9日。
- 21 サハリンの朝鮮人共同体では、生活言語として韓国出身を指す用語が作られた。彼らを「ハングキ」と呼び始めたのだ。これは国家の名称である「韓国（ハングク）」を借用し、ロシア語の文法に沿って変えたものである。
- 22 男性、1990年生、ユジノサハリンスク、2010年8月23日。
- 23 女性、1979年、ユジノサハリンスク、2010年11月17日。
- 24 女性、1989年、ユジノサハリンスク、2010年8月14日。
- 25 男性、1977年、ユジノサハリンスク、2010年8月14日。
- 26 男性、1985年、仁川、2010年11月8日。
- 27 Ищенко М.И. Сахалинцы: к истории формирования региональной идентичности // Краеведческий бюллетень, 2000. № 4. С. 3–14; Она же. Русские старожилы Сахалина. Вторая половина XIX – начало XX вв. Южно-Сахалинск: Сахалинское книжное издательство, 2007.
- 28 Большая Российская энциклопедия. Т. 8.
- 29 たとえば以下を参照。Левин З.И. Менталитет диаспоры (системный и социокультурный анализ). М.: Институт востоковедения РАН; Издательство «Крафт+», 2001. С. 66–70; Милитарев А.Ю. О содержании термина «диаспора» (к разработке дефиниции) // Диаспоры. 1999. № 1. С. 25; Дятлов В.И. Диаспора: попытка определиться в понятиях // Диаспоры. 1999. № 1. С. 9.
- 30 Краткая российская энциклопедия. М.: Большая Российская энциклопедия, ОНИКС, 21 век. Т. 1. С. 820.
- 31 Авксентьев А.В. и Авксентьев В.А. Этнические группы и диаспоры Ставрополя (краткий справочник). Ставрополь: СГУ, 1997. С. 7.
- 32 Краткая российская энциклопедия. Т. 1. С. 820.
- 33 Иларионова Т.С. Этническая группа: генезис и проблемы самоидентификации (теория диаспоры). М.: Нойес лебен, 1994. С. 4.
- 34 Кушхабиев А.В. Черкесская диаспора в арабских странах. История и современность: автореферат дис ... д-ра ист. наук. М., 1998. С. 19.
- 35 Полоскова Т.В. Современные диаспоры. Внутриполитические и между-народные аспекты. М.: Научная книга, 1999. С. 21.
- 36 Левин З.И. Менталитет диаспоры (системный и социокультурный анализ). М.: Институт востоковедения РАН; Издательство «Крафт+», 2001. С. 5.
- 37 Левин З.И. Менталитет диаспоры (Системный и социальный аспекты) // Национальные диаспоры в России и за рубежом в XIX–XX вв. Сборник статей. М.: ИРИ РАН, 2001. С. 45–53.
- 38 Брубейкер Р. «Диаспоры катаклизма» в Центральной и Восточной Европе и их отношения с родинami (на примере Веймарской Германии и постсоветской России) // Диаспоры. 2000. № 3. С. 6–32.
- 39 Усманова Л. В поисках национальной идентичности (тюрко-татарская диаспора в Северо-Восточной Азии) // Диаспоры. 2005. № 2. С. 6–39.
- 40 Дятлов В. Диаспора: экспансия термина в общественную практику современной России // Диаспоры. 2004. № 3. С. 126–138.
- 41 Тощенко Ж.Т. и Чаптыкова Т.И. Диаспора как объект социологического исследования // Социологические исследования. 1996. №

12. Л. 33–42; Тощенко Ж.Т. Постсоветское пространство: суверенизация и интеграция: Этносоциологические очерки. М.: РГГУ, 1997. С. 80.
- 42 Аствацатурова М.А. и Савельев В.Ю. Диаспоры Ставропольского края в современных этнополитических процессах. Ростов-на-Дону – Пятигорск: изд-во Северо-Кавказской академии государственной службы, 2000. С. 53.
- 43 Тишков В.А. Исторический феномен диаспоры // Этнографическое обозрение. 2000. № 2. С. 43–63.
- 44 Семенов Ю.И. Этнос, нация, диаспора // Этнографическое обозрение. 2000. № 2. С. 64–74.
- 45 Арутюнов С.А. Диаспора – это процесс // Этнографическое обозрение. 2000. № 2. С. 74–78.
- 46 Мосейкина М.Н. Русская диаспора в Латинской Америке в послевоенный период // Национальные диаспоры России и за рубежом в XIX–XX вв.: сб. статей / сост. Г.Я. Тарле. М.: ИРИ РАН, 2001. С. 137–148.
- 47 Гадиева А.Н. Осетинская диаспора в Турции: этносоциологический аспект: дис. ... канд. соц. наук. М., 2002. С. 19.
- 48 Рудянов Г.С. Греческая диаспора на Северном Кавказе во второй половине XIX – начале XX века: автореферат дис. ... канд. ист. наук. Пятигорск, 1998. С. 16.
- 49 Нацуко Ока. Корейцы в современном Казахстане: стратегия выживания в роли этнического меньшинства // Диаспоры. 2001. № 2–3. С. 194–220.
- 50 Всероссийская перепись населения 2002 г. Т. 4. Национальный состав и владение языками, гражданство // Всероссийская перепись населения 2002 г. [<http://www.perepis2002.ru>] (2021年11月13日閲覧).
- 51 Всероссийская перепись населения 2010 г. Т. 4. Национальный состав и владение языками, гражданство // Всероссийская перепись населения 2010 г. [http://www.gks.ru/free_doc/new_site/perepis2010/croc/perepis_itogil612.ht] (2015年1月10日閲覧 [2021年11月13日現在閲覧不可]).
- 52 Арутюнов С.А. Роль и место языка в этнокультурном развитии общества // Этнические процессы в современном мире / отв. ред. Ю.В. Бромлей. М.: Наука, 1987. С. 44.
- 53 Нацуко Ока. Корейцы в современном Казахстане. С. 194–220.
- 54 Пак Сын Ы. Адаптационная эволюция обрядов жизненного цикла у сахалинских корейцев // Современные корееведческие исследования в Дальневосточном государственном университете. Вып. 4. Владивосток: издательство Дальневосточного университета, 2006. С. 37–44; Он же. Обряды жизненного цикла сахалинских корейцев: рождение ребенка, пэкиль, толь // XXXVII научно-практическая конференция преподавателей, аспирантов и сотрудников СахГУ: сборник научных статей. Южно-Сахалинск: издательство СахГУ, 2006. С. 41–43; Он же. Проблемы сыновней почтительности «хё» у сахалинской корейской диаспоры // Актуальные проблемы духовно-нравственного воспитания детей и молодежи: материалы региональной научно-практической конференции 25–26 мая 2006 г. Южно-Сахалинск, 2007. С. 63–67; Он же. Сахалинская корейская семья: от традиционной к современной // Феномен творческой личности в культуре: материалы II международной конференции. М.:

издательство МГУ, 2006. С. 133–141.

- 55 訳者注：当時ソ連との国交がなかった韓国への帰還を希望して抗議運動を起こしたサハリン朝鮮人の家族5組が朝鮮民主主義人民共和国に送還(事実上の追放)されたこと。
- 56 Организации корейцев СНГ, г. Южно-Сахалинск, Российская Федерация // Информационный портал корейцев СНГ. [<http://www.arirang.ru/regions/russia/sakhalin.htm>] (2021年11月13日閲覧).

- 57 Пак Хен Чжу. Репортаж с Сахалина. Южно-Сахалинск: ЗАО «Файн Дизайн», 2004. С. 42. [原著は日本語。朴亨柱著、民涛社編『サハリンからのレポート：棄てられた朝鮮人の歴史と証言』御茶の水書房、1990年。原著では、地元のは「先住」、大陸系は「ソ連系」、北朝鮮系は「北朝鮮派遣労働者」と表記されている。]